

◀ 巻頭言 ▶

GHG（地球温暖化ガス）排出課金元年

理事 庄 司 勉

いよいよ我々が船から排出する地球温暖化ガスにお金が掛る事になる。本年1月1日から始まった欧州連合の排出量取引制度（EU ETS（Emission Trading System））である。これは海運界に身を置く我々 Marine Engineer に取って新たな Challenging な Event であり、我々はこれを GHG 排出課金元年と呼ぶ事にしたい。何故、これが我々に取って Challenging なのか？

あるリサーチ会社によれば、海運の排出枠コストの総額は40%適用の本年に33億ドル（約4,700億円）、100%適用の2026年に82億ドル（1兆1,600億円）に達する見込みと予想している。この試算は排出枠価格CO₂ 1トン当たり90ドルが前提である。これはEU ETS に関する試算で、これが早晚全世界に適用され、CO₂の単価が上昇すれば膨大な金額になる事は明白である。この費用を誰が負担するかの議論は、さて置き。

今迄も我々は現場で燃費節減対策として、本船において油の1滴は血の1滴と称してそれこそ血の滲むような Hard, Soft 両面に渡って燃費節減、即ち二酸化炭素排出量削減努力をして来たが、今一その努力が表立って評価されているとは言えないと感じているのは筆者だけでは無いと思う。しかしながらこれからは本船の燃料消費量削減、即ち GHG 排出削減努力が具体的な数値、金額となって表示される事となり、これは今迄よりより直接的な Impact を持って本船の Performance が評価される事となると予想される。これが Challenging と言った所以であるが、これはまた我々にとって諸刃の剣となる懸念事項でもある。

この懸念事項を払拭する為の方法を考えていたら、昨年末のテレビ番組で大谷翔平選手の特集があり、彼の進化はどこから来

るのがテーマだった。一つの結論としてそれは「あらゆるデータを駆使して新たな技術を生み出す『デザイン』と言う手法」（デザイン革命）にあると言う事であった。これはDX（Digital Transformation）と言う事であり、我々の場合はDXをGX（Green Transformation）に繋げる事となる。今日我々も現場のデータがかなりの正確さを持って Real Time に得る事が出来る様になって来ている。この得られた正確なデータを使って、従来から使用している燃料に対してや、これから使用するであろう新燃料に対しての取扱いの新たな技術を生み出す「デザイン」と言う手法でGHG排出削減を達成する事が出来る様になるのでは無いか。即ち、従来とは全く違った形での船の在り方を「デザイン」する事が必要となって来ると思う。この「デザイン」をどの様に描くのかは、異分野の Specialist の方々の協力が重要である事は当然であるが、基本は現場を把握している我々 Marine Engineer が主役とならなければ良い絵は描けないだろうし、それが我々の使命であり、競争力の源泉ともなるであろう。ただこれには前提条件があり、新たな技術のデザインを描きたいと言う好奇心と向上心、更には執着心がなければならないと言っていた。即ち、それを行うのだと言う覚悟が必要だと言う事である。

地球温暖化対策を実践するのは我々なんだとの気概を持って新たな技術のデザインを描きたいものであるし、描かなければ我々の存在価値は高まらないのではないだろうか。

